

創政会先進地視察報告書

1 視察先・目的

- 北海道帯広市
「フードバレーとかちの取り組みについて」
- 北海道石狩市
「地域の拠点を目指した図書館運営について」
- 北海道北広島市
「下水処理におけるバイオマス利活用の取り組みについて」

2 期 間

平成28年8月3日～5日

視察報告書

日 時	平成28年8月3日（水） 午後3時から4時30分まで
視 察 先	北海道帯広市
視 察 項 目	フードバレーとかちの取り組みについて
視 察 者	創政会（川脇裕之、伊藤清一郎、竹内慎治、林 秀人、伊藤正治、渡邊眞弓、伊藤公平、富田一太郎、江端菊和、勝崎泰生）
視 察 内 容	<p>「フードバレーとかち」の生みの親、米沢帯広市長の強いリーダーシップのもとこの事業は始まった。北海道十勝地方にて帯広市が中心となり、16町、2村、計19市町村（人口約36万人）を束ねている。フードバレーとかちのコンセプトとして、世界における共通の4つの課題（食料、水、環境、エネルギー）や、地域を取り巻く環境（経済のグローバル化、アジア諸国の経済発展、少子高齢社会の到来、地域主権の時代）の変化に対応すべく、地方から日本を変えていく気概で、地域の力をさらに高め、自立したまちづくりの推進をしていく旗印として職の総合産業化「フードバレーとかち」を立ち上げる。また研究開発にも力を入れており、十勝の産業を支える試験研究機関として帯広畜産大学、北海道農業研究センター芽室拠点、十勝農業試験場、十勝圏地域食品加工技術センターなどが存在する。農林漁業を成長産業にする、食品の価値を創出する、十勝の魅力を売り込むと言った3つの柱で事業を進めており、それらの戦略内容は19項目にも及ぶ。取り組みを効果的に進める環境づくりに努め、国際戦略総合特区という国の規制緩和など、取り組みを進めるツールとして活用している。</p>
所 感	<p>フードバレーとかちの推進は、米沢帯広市長の強力なリーダーシップにより実施した事業である。「食と農林漁業」を柱とした地域産業政策「フードバレーとかち」に取り組み、農産品出荷額の大幅な増加等、めざましい成果を上げている。当該事業については事前に調べた内容よりも多岐にわたり、また具体的な事業内容についても大規模に実施されていることに驚くと共に感心した。細かい事業内容についてはそれぞれに検証ができ、本市における様々な事業に照らしあわせ今後検討していく上で参考になる事例も多々あると感じた。一般的に農業は儲からず、後継者もないというイメージをもたれる傾向にあるが、帯広市では農家は高収入であり、後継者不足の問題もないということである。また、耕作放棄地も皆無に等しく、新規就農は難しい状況となっている。全国的に人口減少傾向の中、昨年 of 国勢調査では、札幌市、千歳市に次ぐ人口増加数であった。それに伴い、法人税、個人市民税と右肩上がりの税収増である。道内の住みよさランキングでも2位である。</p> <p>本市とは利用可能な土地には違いはあるが、その土地の特性を活かし、発展、成長させ新たな産業を生み出している帯広市の取り組みは参考になった。本市だけではこのような取り組みは難しいと考えられるので、知多半島で利害を超えて、知多ブランドを確立していくべきではないかと感じた。</p>

視察報告書

日 時	平成28年8月4日（木） 午後3時から4時30分まで
視 察 先	北海道石狩市
視 察 項 目	地域の拠点を目指した図書館運営について
視 察 者	創政会（川脇裕之、伊藤清一郎、竹内慎治、伊藤正治、林 秀人、渡邊眞弓、伊藤公平、富田一太郎、江端菊和、勝崎泰生）
視 察 内 容	<p>石狩市民図書館では、「図書館のなかに街を作る」というコンセプトを掲げ、人々の喜びを生み出すことを図書館の目標として運営を実施している。「バリアフリー・デザイン賞」や、日本図書館協会制定「建築賞」、一般社団法人公共建築協会「公共建築賞」などを受賞したことのある評価の高い図書館である。</p> <p>「段差がなく、ゆったりしたつくりであること」、「貸出冊数に上限がないこと（貸出期間は2週間）」、「自動貸出機を設置していること（開館当初に導入）」、「他自治体と、図書館同士で友好図書館協定を締結していること」「閲覧室内での飲み物は可能であること（食べ物はホールのみ）」などが主な特徴である。また、写真展や、絵画展、作品展、コンサート、映画上映会、科学実験室など、ボランティアの協力も得ながら、様々なイベントを開催している。</p> <p>今回の視察では、石狩市民図書館ビジョンに基づく取り組みである次の5つの項目「1. 子どもの学びを支援する」「2. 資料提供や情報発信を通じて生涯学習を支援する」「3. 市民の誰もが利用できるような環境を整備する」「4. サービスを支える基盤を整備する」「5. 利用者の期待に応える蔵書・情報源を構築する」を中心にヒアリング調査及び現地視察を実施した。</p>
所 感	<p>多くの来館客が読書するだけでなく地域の物産店の併設、写真展や映画鑑賞、その他様々なイベントを開催するなど、まさに地域の拠点として市民に認知され、またその運営に多くの市民が参加し市民協働の事業展開が確立されていることに感心した。そして、利用者に対する配慮も考えられており、各通路の間隔も車いすの通行を配慮した広さを確保してある点や、子ども用書籍スペースは低い書棚を使用して、子どもたちにも利用しやすい設計・運営をしていることは素晴らしいと感じた。民間のボランティアとの調和もよく、図書館のいたるところに利用者のための机があり、使いやすさが利用者の拡大につながっていると感じた。</p> <p>また、「石狩市民図書館ビジョン」に基づく取り組みとして、石狩市教育プランの5つの柱に対応して、様々な施策を展開しているが、職員の熱意と利用者や協力者及び協力団体との連携によりおおむね結果が出されていた。本市の図書館は指定管理としており、運営は指定管理者に委ねているが、今後の公民館等の運営のあり方を考えていく上で、図書館での事業展開も視野に入れて考える上で、新たな提言等も含め考える機会ができた。</p>

視察報告書

日 時	平成28年8月5日（木） 午前10時から正午まで
視 察 先	北海道北広島市
視 察 項 目	下水処理におけるバイオマス利活用の取り組みについて
視 察 者	創政会（川脇裕之、伊藤清一郎、竹内慎治、伊藤正治、林秀 人、渡邊眞弓、伊藤公平、富田一太郎、江端菊和、勝崎泰生）
視 察 内 容	<p>平成23年に稼働を開始した下水処理センターのバイオマス混合調整棟は、全国で初めての家庭系生ごみの混合処理施設であり、下水汚泥に加えて他のバイオマス（家庭系・事業系生ごみ、し尿・浄化槽汚泥等）を集約・混合処理している。また、処理の過程で発生する消化ガスは、下水処理センター内で消化タンク加温用ボイラや乾燥機の燃料として全て利用し、発生する乾燥汚泥は、肥料として緑農地還元するなど、先進的な取り組みを実施している。この下水処理場活用による廃棄物処理施設を合理化することにより、地域の廃棄物処理施設の合理化を図ることができた。これにより、最終処分場の延命化、焼却炉の規模縮小、し尿処理場の代替を実現している。</p> <p>今回の視察では、下水処理センターに伺い、「北広島市バイオマスエネルギー推進プラン」、「循環型社会形成推進地域計画」に基づいた下水汚泥を始めとする地域のバイオマス5種類を、既存の下水処理センターを利用した一括混合処理する取り組みを中心にヒアリング調査及び現地視察を実施した。</p>
所 感	<p>2市3町（北広島市、恵庭市、長沼町、南幌町、由仁町）で広域の一般廃棄物の焼却処理を実施している取り組みや、最終処分場埋立容量のひっ迫という問題、家庭系・事業系ごみに約3～4割含まれる生ごみの別途処理の必要性が本事業の背景にあることは、ごみ処理全体の問題として欠かすことのできない視点であると考えます。</p> <p>類似施設の一元化により、約10億円の建設費を削減していることや、施設管理を集約化することによる人件費等を削減し、約1億円/年のコストダウンを図っていること、発生する消化ガスを下水処理センターで使用することにより、年間約180キロリットルの重油使用量の削減を実施していること。そして、重油を消化ガスに置き換えることによってCO₂の発生量の年間約490トン削減し、生ごみを最終処分場で埋立て処理する場合に対して、バイオマス利活用によりメタンガスを年間約180トン削減されることなど、定量的な効果が検証されており、素晴らしいと感じた。</p> <p>また、受入れ不適物（金属片やプラスチック片等の異物や貝殻類や卵の殻等）の混入があると処理能力が下がるなどの機械破損の恐れがあるため、市民周知を図っていること、今後も生ごみ分別意識が根付くように啓発していくことが必要と考えていることなどは、本市の家庭系ごみの分別や収集においても課題になる点であり、参考事例として今後の研究に活かしていきたいと思う。</p>